

慢性化してしまうとあまりにも大きな代償がついてくる。家庭内で虐待を受けている子どもが、幼稚園や学校などでは何でもない普通の子どもと見られるように努力することも珍しくない。彼らは家庭内で起こっていることを隠そうとする。その事実を一切誰にも話さないばかりか、実際にその事実を忘れてしまっているかのように見える場合すらある（否認）。また感情や感覚を持てなくなることもある（麻痺）。虐待を受けている子どもが、他の子どもとのやり取りの中で暴力的な振る舞いをして泣かせてしまったような場合でも、その子自身は相手の子がどのような痛みを感じ、どんな気持ちになっているかが理解できないといったことも少なくない。こうした否認や麻痺は、虐待などの行為によってもたらされる激しい悲しみや痛みなどから、自分自身を保護しようとする防御機制であり、慢性的なトラウマ体験が生じる環境に対する適応の結果なのである。否認や麻痺は共感性の欠如につながり、ひいては親密な人間関係形成の障害になる。自己催眠や解離も慢性的で反復的なトラウマ事象から自己を守るために子どもが発展させる技術のひとつである。しかしこれも悲しい一時のぎにしかならず、慢性化した場合、痛みに対する無感覚や全般的な無感情状態、他者に対する共感性の欠如など、生きていく上でさまざまな弊害をもたらす可能性がある。

- 長期にわたり父親から暴力を受けてきた小1のA君は、入院中、要求が通らないとしばしば攻撃的、パニックになっていたが、転んで頭をしこたま打った時はグッと無言で我慢する姿が痛々しかった（痛みに対する麻痺）。
- 両親から暴力を受けてきた小5のB君は、入院当初は人の顔を見ることができず、いつも俯いて隅の方を歩いていた。グループ活動や遊びにも回避的で、悲しい・楽しいはずの事柄に、まるで無感情・無感覚な鎧をまとっているかのように参加していた。入院して、安全・安心した環境内のいわゆる育てなおし・躰けなおしの

経過の中で、少しずつ外界へ関心を持ち始め、他者と表情豊かに交流する姿が見られるようになった。入院を1年経過した頃に、診察場面で『(家では)僕は見ない感じないようにしてきた。今は色々なことが見えて考えることが面白い』と実感をこめてしっかりと目を見て話す姿が印象的であった。

- C君は、父親から暴力を受けているときのことは『今はゲームをしている』と呪文のように唱えていたと話す。この呪文を繰り返すことによって、C君は晒されている過酷な状況から心身の痛みを無意識に防御していた（自己催眠）。
- 幼児期より母親からの心的な虐待を受けてきた小5のD子は、『母親が怒鳴った瞬間から頭の中が真っ白になり何も覚えていない、気がついた時には公園に居た』と話す（記憶の部分欠落で解離現象のひとつ）。

強い怒りも、慢性的な虐待環境の中におかれている子どもによくみられる特徴である。幼稚園や学校などで他の子どもに対して非常に攻撃的になることが多かったり、あるいはかんしゃくを起こしてパニックに陥りやすいといった状況を多く目にする。これはトラウマ体験によって怒りの感情が蓄積され、その怒りの感情を適切にコントロールできないことによるものだと考えられる。自己毀損行為も、怒りが内向し、自分自身に向けられたものだとみることができる。このように、被虐待による心理的メカニズムの基盤は、虐待環境に適応するために現実を否認したり感情や感覚を麻痺させ、自己催眠や解離などの技法で自己を守り、その一方で激しい怒りを抱え込むといった状態像が浮かび上がってくる。

今回は、対応と今後残されている課題を述べたいと思う。

